

京都市地域・多文化交流 ネットワークサロン通信

発行日 2017年7月1日 編集・発行 京都市地域・多文化交流ネットワークサロン 第22号

2017年4月22日「東九条春まつり」報告



様々な背景やルーツをもつ人たち、また子どもから高齢者まで、一人一人が主人公として集り、楽しみ、交流し、理解を深め、つながることを目指してきた春まつり。当日の朝、矢吹実行委員長、山王学区自治連合会藤岡会長のごあいさつで春まつりがスタートしました。藤岡会

長からは、「京都駅東南部エリア活性化方針」が策定され、これから東九条が大きく変わろうとしていることが紹介されました。

さて、今年の新しい企画は、シニアと若者のトークショーでした。

午前中には、ホールで「シニアトークショー」を行いました。東九条で生まれ、貧しさや差別の中で育ち、音楽に出会って生きる力を与えられ、京都市立芸大へと進まれたコリアン2世の朴実（パク・シル）氏。山形で生まれ育ち、障がい者の自立を目指して東九条を拠点に活動を続けてこられた矢吹文敏氏。全く違った背景を持つお二人の人生と出会いを、ユーモアたっぷりに、歌も交え、語っていただきました。人の出会いには必ず緊張や葛藤があるもの。しかしそれを通して、これほど豊かな出会いが生まれるのか・・・会場はお二人のトークに引き込まれました。この通信では、お二人のトークをすべて載せることはできませんが、エキスだけご紹介します。午後に行った「若者トークショー」では、多彩で新鮮な若者の声がたくさん飛び交いました。紙面の都合上、次号でおたのしみください。（叶 信治）

東九条トークショー〈シニアの部〉 朴実 × 矢吹文敏



朴…生まれは東九条西山王町です。音楽を職業として、ピアノを教えたりして、50年くらいになりました。うちがむちゃくちゃ貧しくて、最初、生活保護を受けてたんですけど、父親が1年生で亡くなって、兄弟7人で、あの頃、在日は生活保護、なかなかとれなくて、打ち切られて給食代も払えないんで、なんとかお金稼がないといけないと思って、アルミとか真鍮とか鉄くずとか集めて、それだけでは食っていけないから、新聞売りとか新聞配達してね。この辺はバラックというか、狭いうちがいっぱい並んでてね。3畳とか4畳半とか6畳のベニヤで仕切られたようなうちがいっぱいあったんです。新聞屋さんから、多い目に新聞をもらって（とってきて）、そこ行って新聞を売って生計を立てていました。

鴨川でね、おぼれて死にそうになったことがありました。ザリガニとかいろいろなものって食べました。で、犬の肉とかも食べました。なんでも食べました。そういう生活です。貧しかったけど、人が多くて活気があったんですね。ほんとに今さびしくて、人が戻ってきてほしいなあ、そういう風に思います。

矢吹…私、朴さんと同じ歳なんです。1944年、まだ広島に原爆が落ちる前の11月に山形で生まれました。京都へ来たのが1987年。障がい者の自立生活運動を一生懸命にやってくれていた、長橋さんっていう方に「手伝いに来い」と言われて来ました。私は、小さい時から立ったこともないし、よく人生を、「地に足がつかないとダメだ」と言われているんですけどね、私、この地に足がついたことないんですね。骨が軟らかい病気で、何回も何回も小さい時から骨が折れて、30回くらいは骨折してるんじゃないかな〜。兄弟7人だったんで、きゅうり1本をみんなで細かく切って食べたという話でした。かなり貧しかったんだろうなあ、と思います。



朴…昔、この界限は、オモニたちやノリモニたち、そして日本の方も、ヤミ米の買出しをしていました。在日の多くの、特にオモニたちの仕事がそうだったですね。どぶろくを密造したり。みんな、仕事がないんですよ。東九条って、日本人も、多くの人が部落出身なんです。助けあって生きていったらいいのに、毎日けんかなんですよ。お互い、底辺に置かれた差別されるものが足を引っ張り合う姿は、子ども心にも、とても辛かったです。東九条マダンの最初の呼びかけに、「全てここに集う、在日韓国・朝鮮人、日本人、障がい者、いろんな人たちが共にマダンを作っていくことを通して、自己解放を得たい」と書いてあるんです。30数年前、ハンマダンを結成した時、部落出身の人は、子どももいて日本人と結婚してるのに、結婚すら認められない、家にも入れてもらえないという状態…こういう人たちと一緒に生きていきたい、一緒に文化を作りたい、と思いました。差別されている人間も辛いけれども、差別されない立場の人も一緒に生きていこうと思った。うちのオモニがこうやって（胸をこぶしで叩きながら）、「なんの運命や」って慟哭する時があるんです。私の連れ合いは日本人ですけど、姑のそういう姿を見て、日本人としてどうすることもできない、その辛さも見てきた。これを克服したい。この町でみんなと一緒に生きていきたい。その願いだけは今も変わらないし、核心のように思っています。

矢吹…うちの田舎の方で、「よそもの」という言葉があるんですよ。親子3代経たないと、地元の間人間になれないみたい。まさしく俺は、この京都に来て「よそもの」になったんですね。言葉もわからない、道もわからない、友だちもいない、ここに呼んでくれた長橋さんしか知らない、そういうところに飛び込んできたわけですね。その長橋さんが、日本で初めての日本自立生活センターを立ち上げて、白梅町のちっちゃな民家の小部屋を借りて始めたんです。だんだん手狭になってきて、移らなきゃなんないなって時に、長橋さんが私に「俺は今、南区の駅からもっと南のところに事務所を移したいと思ってるんだ。そこには部落の人たちがいて、あるいは在日の人たちがいて、そこへ、我々障がい者が飛び込んだらどうなると思う？」って。どうなると思うって言うてもね。1993年に、東九条へ引っ越して来たんですけど、なんかかかんとか事務所を探したのが北松ノ木町。今のエルファのところ。今にもひっくりかえりそうな事務所を借りて、そこに拠点を構えました。印象深かったのが、引っ越してきたその年の秋、2回、大きな火事がありました。なんと、にぎやかな町だろう、と。松ノ木団地には、毎日、消防車が来て、今日も火災報知機いたずらされた、なんか誰かが上からとびこんだ…ドラマティックな町なんですよ。ただ、実はものすごく怖かったです。車いす蹴飛ばされないかなあ、意地悪されないかなってという恐怖感がありました。

朴…私も差別者だって糾弾されたこと何回もあってね。最初、東九条マダンの呼び掛け文の中に、「障害者とともに」っていう言葉もあったんですけどね、ある障がい者から、「あんたら差別者や!!その7文字を消せ!!」と言われて消したことがあったんです。その経緯はね、東九条一带にチラシをまくんですけど、その障がい者から連絡があって、自分は寝たきりで動けない。実行委員会も行きたいし、いろんなことに参加したいけど、こんなビラを置くだけで、自分らは障がい者のことをいったいなんと思ってるんだ、って言って。しょっちゅう糾弾されました。でも、そういう中で、マダンに関わっておられた障がい者のところに、できるだけみんな、介助に関わったりしました。そしてだんだん、一緒に生きようっていうのが生まれてきたんです。今あるマダンセンターは地域労働センターゆって、もともと喫茶店とかやってたところなんです。段差もあるし、車いすのトイレがない。改築する時に、大きなトイレ、難しいけど手作りの木のスロープ、そんなん作った…そういうのが出来たのは、やっぱり、糾弾されたり、いろんなこと切磋琢磨してやってきたから。第1回東九条マダンの時も、涙が出て涙が出てたまりませんでした。ほんとにうれしかったです。これからこういうことがほんとに始まる、そういう思いでした。

叶…お話しかがっていると、自分が朝鮮人として苦勞してきた、その苦勞を強いてきた日本人が悪いんだ、という、それは歴史的にそういう経緯があったにしても、朴実さんのとらえ方はそれだけではない、人って民族だけではなくて、いろんな人との出会いの中で学んだり変えられたりしていく、それが大事なんだ、そんなメッセージに聞こえるんですけど…。矢吹さん、東九条に障がい者が飛び込んできたら、どうなるんだろう、という実験、そのあたりのこの20数年間の感想を…エピソードなどあったら…。

矢吹…実験という言葉が正しいかどうかはわかりませんが、まあ、かなり、実験は成功でないかと思っています。私らから見たら、在日だろうが、部落だろうが、健常者なんです。そこが非常に複雑でも、実はどうでもいいんです。在日だろうが、部落だろうが、障がい者だろうが、ほんとはどうでもいいんです。人間なんです。その人間対人間が、なんでこんなばかばかしいことでやりあってるんだ、と私は思っていて…。それよりなにより、朴さんと、マッコリがいいのか、日本酒がいいのか、ワインがいいのか、ビールがいいのか…そういう話をした方が、もっともっと仲良くなれるんじゃないかな、というふうに思っています。ちなみに、山形の酒は、おいしいです。



朴…矢吹さんと最初に出会った時、山形の酒をね、飲ましてもらって、ほんとにおいしかったです。私、酒好きなんです。だいたい在日のうちでマッコリ作っていたとこ多いんですけどね。40番地のバラックいっぱいあった時に行ったら、たいがい作ってるんですよね。「うちは玄米で作った」「うちはもち米で作った」うちは何々から作った、こういう仕込みをやってて…て。ハルモニたちが、「一杯飲んでいけ」「一杯飲んでいけ」って言って、もう帰る時にはフラフラになってね。この東九条で、キムチとマッコリ、これは外せない。私の次の夢は、「マッコリ特区」を、この東九条で、議員さんに働きかけて、マッコリをどこでも飲める東九条にしたい、と、そういう夢があります(笑)。

矢吹…私が山形の地区文化をここに持ち込もうかな、と思うとですね、まず、いも煮会でしょうね。とりあえずはね。里芋、牛肉、ねぎ…いろんなものを煮込んでやったりしたらおもしろいかな、と思ったりします。京都で、たこ焼とお好み焼が夕飯になる、って相当びっくりしました。山形で、おこのみ焼、たこ焼で夕飯を食べようとしても無理だし、まず、お店はつぶれると思いますし、ありえないことなんです。去年、ここでもやりましたが、世界の食文化を体験しようって言って、いろんなもの集めてもらって、やりましたけど。まあ、広い多文化は、地区文化からってね。

叶…幅広い多文化が食文化から、という話が出ましたけれども、残った時間、少し文化とか芸術とか、そういう話聞きたいと思うんですけど、歌っていうのも、文化のひとつですね。矢吹さんが、かつて歌われていた童謡があるということで、歌っていただきたいなあ、と。「蛙の笛」ですね。歌の紹介を…

矢吹…若い頃ですねえ、文通というのが流行ったんですね。文通をしながら、広島の一回も会ったことがない彼女に、ちょっと、ほや~っとなって、で、お月さまを見ながらですね、なんか歌う時にこれを歌った、そういう思い出です。

蛙の笛

月夜の 田んぼで コロコロコロコロコロ 鳴る笛は
あれはね あれはね あれは蛙の 銀の笛
ささ 銀の笛

叶…朴実さんは、京都市立芸大を卒業されて、今でも、卒業生としての、さまざまな活動に関わっておられます。この芸大が来るにあたって、朴実さんの思い、願いとかを話していただきたいと思います。



朴…私は食べられなかったから、音楽聴いてほんとに涙がぼろぼろ出て、そこから生きる力をもらったんです。やっぱり今の学生も、貧しくて、純粹です。今年、ピアノ科でトップで出た子なんですけども、青森の田舎から来た子で、その子はねえ、貧乏で、12歳までピアノを弾けなかったんです。ピアノもなかったんです。その子が18歳で芸大に入ってピアノ科に入って

ね、そして、今年トップで出て、コンクールでもすごい、いい成績とって、そんな子が出てるんです。その子は、自分らのように貧しくて、音楽に触れることができなかった、その子たちに、音楽を伝えたい、という文章書いてて、今の時代も変わらないものがあるな、と思いました。そして、そういう学生たちが、この周辺にたくさん来ると思うんです。ぜひ、そういう子たちと、すごい大変ですけど、学生たちとね、私たちは新しい町を作っていきたいなあ、と思います。

矢吹…障がい者が障がい者のために、障がい者自らが運動をし、支援をしていくという、私たちの基本理念というのかな。障がい者の芸術ってわざわざこう、そこに障がい者というのを入れるっていうのがどうかっていうのが、私は疑問なので、これ障がい者が描いたんだから上手でしよって言われたら、誰も下手だと言ってない、そういう絵ではダメだろなって思ってます。切磋琢磨して、音楽の道に入れたらいいな、あるいは、絵の世界に入れたらいいな、というふうに思っている、ただ、それをやっぱり、ちょっとでも手助けに導いてくださる方がいないと、たぶん、無理でしょうね。「サムのたまご」の人たちが、一生懸命やっていく、それがまた、いつかはリーダーになっていく、障がい者のリーダーになっていく、そういうのを夢見たら、楽しい思いがあるなあ、と思っています。私は今、合唱団のメンバーに入ってるんですけども、障がい者が、健常者と一緒に450人くらいで歌うんですね。できるだけ多く参加者に一緒にやってもらえれば楽しいな、というふうに思っています。

朴…東九条マダンから生まれた芸術っていうか、象徴として、和太鼓サムリっていうのを誇りにしています。和太鼓を作ってるのは部落の産業やと。それとサムレノリっていうのは、けして相容れないものではないし、一緒にできると思った。でも、一緒にやってみたら、全然できなかったんです。じゃ、若者たちがね、その出会いから、別れようと思ったこととか、一回退く、そしてまた再びやるということ、音にしてくれたんです。たしか、第7回のマダンの時。もうそれを聴いて涙が出ました。毎年、新しく作っていかうと。そし

て、今年また、東九条マダンでやります。

矢吹…今、みんなが、非常に簡単なことばで、「共に生きる」って、言ってるんですね。ちょっと意地悪に、誰と共々いきるの？って聞いてみると、その主語がないんですね。つまりは、共に生きるって言ったときに、自分たちの心の中に、誰と共々いきるのかっていうのを、ちゃんと肝に銘じないと曖昧で、美しいことばで、なんも解決しないですね。とにかく、共に生きるって、簡単じゃないぞ、まだできてないぞ、あるいは、できていないから、できそうなことを言うて、みんななんか、それでごまかしてるけども、誰と共々いきるのかだけを、やっぱりみんなできちっと捉えないと、苦情だけ言ってる九条では、ダメなんではないかなあって、思ったりします。今後とも仲良くしていただけたら、ありがたいなあっていうふうに思います。

叶…これから、芸大、新しい人たちもこの地域にたくさん来ると思っています。芸術を目指す人たち、とりくんでいる人たちと、この東九条の地域、これからどういう出会いを作っていけるのか、一緒にこの地域が、さらに活気あるものになっていけたらいいなと思います。



<トークショー参加者紹介>

朴実（ぱくしる）…京都・東九条CANフォーラム代表

矢吹文敏（やぶきふみとし）…日本自立生活センター代表 第6回東九条春まつり実行委員長

叶信治（かのうしんじ）…希望の家カトリック保育園園長

□トークショーの内容は、ネットワークサロン通信掲載用に、一部省略しています。

□第6回東九条春まつり「東九条トークショー若者の部」の内容は、ネットワークサロン通信第23号に掲載予定です。おたのしみに!!



LA LA KITCHEN

2017年5月27日(土) 10時~12時

講師…服部千鶴さん 参加者…5名フィリピン人

外国籍市民向けの料理教室 LA LA KITCHEN をしました。「ぶりの煮つけ」と「豆ごはん」を教えてもらいました。タガログ語、英語、日本語、ジェスチャーで交流しながら、本当に楽しく料理を学ぶことができました。次回のメニューは、参加者のリクエストで「お好み焼き」になりました。日時は7月29日(土)の10時からです。外国から来られたお友だちがいっしょにいたら、ぜひ一緒にご参加くださいね。



ぬりえをたのしみませんか？

2017年6月8日(水) 14時~17時

講師…寺田まり子さん(色彩アートセラピスト)

参加者…5名フィリピン人、1名ベトナム人

日本で暮らしている外国の方のストレス解消や、脳の活性化のために、「ぬり絵」をおこないました。好みの絵柄を選んで、自由に心のおもむくまま色を塗ったり、自分らしさを表現したり、色彩を楽しんだりします。そして、自分で塗った絵の説明をし合いました。終わってから、「自分の考えていることが言えて楽しくなってきた。」とか、「ぬり絵はとても素晴らしく興味深く、自分を幸福に、そして楽しませてくれる。」とか、「ぬり絵は自分の中にあるものを解放でき、自分の中にある新しいものを知ることができた。」など、感想が出ました。とても有意義な時間を過ごしました。



□ 所在地: 〒601-8006 京都市南区東九条東岩本町 31 (京都市地域・多文化交流ネットワークセンター内)

□ TEL: 075-671-0108 □ FAX: 075-691-7471 □ E-Mail: info@kyotonetworksalon.jp

□ 開館時間: 9時~17時 □ WEB サイト: http://www.kyotonetworksalon.jp

□ JR 京都駅八条口・京阪東福寺駅・市営地下鉄九条駅より徒歩 15 分

京都市バス 42・202・207・208 系統 九条河原町より徒歩 10 分/84 系統 河原町東寺道より徒歩 1 分